

ハリウッドは女優を女神にしなかった

しばやまみきお
評論家、翻訳家
芝山幹郎

ソフィア・ローレン。イタリアの女優だがハリウッドで評価を受け、世界的な女優となった。写真は『楡の木陰の欲望』(1958年)より

レスリー・キャロン。フランス生まれ。主演したミュージカル映画『恋の手ほどき』(写真)は、1959年のアカデミー賞で作品賞など9つの部門を制した



マレーネ・ディートリヒ。ドイツ出身。デビュー作の『嘆きの天使』(1930年)で評価を受けハリウッドへ。写真は妖艶な演技で観客をうならせた『上海特急』(1932年)

ヴィヴィアン・リー。イギリス出身。アカデミー主演女優賞を受賞した『風と共に去りぬ』(1939年)のスカーレット・オハラ役はあまりにも有名

多国籍かつ多民族の女優たちがハリウッドに集まってきた

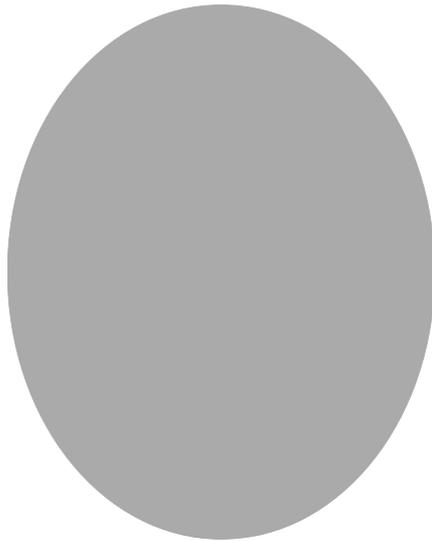
もう何年も前のことだ。ロサンジェルスで映画好きの中年男たちと飲んでいたときに、ハリウッド女優ではだれが好きかという話になったことがある。最もありがちで最も凡庸な酒席の話題だが、不滅のテーマであることもまちがいない。

LAで生まれ育ったユダヤ系の友人は、レスリー・キャロンの名を挙げた。イタリアとイングランドの血が入ったオランダ系の友人は、ソフィア・ローレンが好きだといった。

アイルランド系の友人は、ヴィヴィアン・リーに憧れつづけていたとつぶやき、恥ずかしそうに顔を赤らめた。

日本人の私がマレーネ・ディートリッヒの名を持ち出したところで、われわれは思わず顔を見合わせてしまった。理由のひとつは、全員が古い女優だったことだ。もうひとつの理由は、挙げられた4人がすべて外国出身の女優だったことだ。

もつと若い女優も挙げようよ、とアイリッシュが提案した。ジュリエットはレナ・オリンといった。ダッチはペネロペ・クルスを推した。アイリッ



ユマ・サーマン。ボストン出身。『バルブ・フィクション』（1994年）でアカデミー助演女優賞にノミネートされた

シユはニコール・キッドマンを、私はユマ・サーマンを指名した。

やっとなアメリカ育ちの女優が入ったね。そういつてわれわれは笑ったが、唯一アメリカでキャリアを出発させたサーマンにしたところで、母方はスウェーデン系だ。トレレボリというスウェーデンの港町には、祖母をモデルにした裸婦像が立っているという。

そういえばね、とアイリッシュが話を接いだ。「ジョン・フォードが面白いことをいつている。ハリウッドは地理的に定義できない場所だ。所在地を本当に知っている人はどこにもいない——つて」

「じゃあ、俺は根なし草か。幻の土地で育ったというのか」
ジューイッシュが話を混ぜ返したが、眼は笑っている。映画は、やはり特殊な産業なのだ。夢の工場、ティンセルタウン（金ピカの町）と呼ばれてきた背景にはいくつもの要素がある。金やスキャンダルにまつわる逸話のみならず、移民と同化に関わる難問も、虚構のき

わどさと紙一重だったにちがいない。政治的亡命者、才能を買われて移住した者、食い詰めた流れ者、一攫千金を狙う山師……ハリウッドに集まってきた彼らは、多国籍かつ多民族だ。摩擦や衝突は数限りなくあつたろうに、よくぞここまで破綻せずにやってきたのだと感心する。

オスカーだつて、昔は外国出身の女優が獲つていた

グレタ・ガルボはスウェーデンから来た。ディートリッヒはドイツ、ザザ・ガボールはハンガリー、アリダ・ヴァリはイタリア、レスリー・キャロンはフランス、オードリー・ヘプバーンはベルギー、イレエネ・パパスはギリシャ、マリア・シエルはオーストリア、モーリン・オハラはアイルランド、マルト・ケラーはスイス、キャサリン・ジータリジョンズはウェールズ。

女優の出身地を並べてみても、まるでサッカーの欧州選手権だ。これに先述のキッドマン（ハワイ生まれだが、3歳でオーストラリアに移住）やクルス（スペイン）、さらにはサルマ・ハエック（メキシコ）、ソニア・ブラガ（ブラジル）、コン・リー（中国）らの名を加えると、さながらワールドカップの様

相さえ呈してくる。

ハリウッドが輸入したのは、女優だけではない。ケイリー・グラントやチャリー・チャップリンはイングランド、モーリス・シユヴァリエやジェラルド・ドバルデューはフランス、バリー・フィッツジェラルドやピーター・オートウールはアイルランド、シヨーン・コネリーはスコットランド。きりがないのでもうやめておくが、近年も、アノルド・シュワルツェネッガー（オーストリア）、アントニオ・バンデラス、ハビエル・バルデム（ともにスペイン）といった大物の輸入がつづいている。

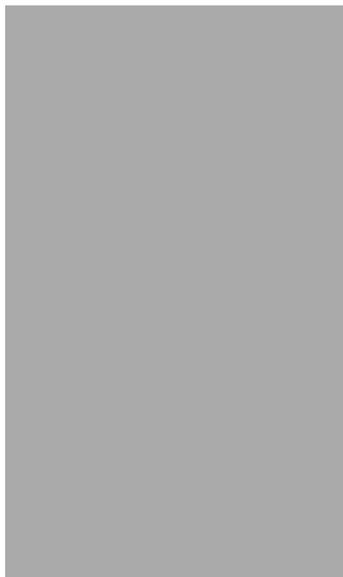
「オスカーだつて、昔は外国出身の女優がよく獲つていたんだよね」

古い映画にくだしいダッチがいった。メアリー・ピックフォードやノーマ・シアラーがカナダ出身、フランスで生まれたクロード・コルベールが3歳のときアメリカに移住した例はよくとしても、ルイーズ・ライナー（ドイツ）、ヴィヴィアン・リー、グリア・リッド・バーグマン（スウェーデン）など、30〜40年代の主演女優受賞者には欧州勢が目立つ。さらにいえば、50年代は、10人の受賞者のうち5人が欧

→エリザベス・テイラー。アカデミー主演女優賞は『バタフィールド8』(1960年、写真)と『バージニア・ウルフなんかこわくない』(66年)で2度受賞

↓オスカー像を掲げるオードリー・ヘプバーン。ベルギー出身。『ローマの休日』(1953年)でアカデミー主演女優賞獲得

写真提供：共同通信社



州出身者なのだ(リ、オードリー・ヘプバーン、アンナ・マニャーニ、バーグマン、シモーヌ・シニョレ)。
アメリカの観客は絶対的偶像を求めなかった

ところが、60年代以降になると、状況は様変わりする。キャサリン・ヘプバーン、エリザベス・テイラー、サリー・フィールド、ジェーン・フォンダといったアメリカ生まれの女優が複数

回の受賞を果たすのに対し、外国映画出身者はソフィア・ローレン(イタリア)、ジュリー・アンドリュース、マギー・スミス、グレンダ・ジャクソン、エマ・トンプソン、ヘレン・ミレン(すべてイングランド)、キッドマン(オーストラリア)らが名をとどめるにすぎなくなってしまうのだ。

いいかえれば、30〜40年代に訪れた「ハリウッド映画黄金期」を築き上げたのは欧州から来た映画人だった。ナチスに追われてやむなくアメリカに移住した者。富の匂いを敏感に嗅ぎつけた者。不遇と野心がこすれ合い、異なった民族の性癖がハリウッド独特の仕事や生活と入り混じって、面白い化学反応を起こしたと見るべきだろうか。

逆にいうと、黄金期のハリウッドは定石や制度や固定観念に執着しなかった。スターを見る楽しさに目覚めた観客が、さらにスターを作り上げていったのは事実だが、アメリカの観客は、国を挙げて讚美する対象や、唯一無二の絶対的偶像などは求めなかった。

これは、「国民的娯楽」^{ナショナル・エンターテインメント}と呼ばれる野球とは決定的に異なるところだろう。たとえば、20年代のベープ・ルースはジャズ・エイジの狂躁を体現した。40

年代のジョー・ディマジオは裕福で鷹揚なアメリカを象徴した。テッド・ウイリアムズは究極の技術と天才の狂気を代表し、ジャッキー・ロビンソンは人種差別の克服と同化の難問を担った。以後は、ドミニカやプエルトリコや日本からの「才能の輸入」がつづく。いわば、野球は「白人の独占」から出発し、しだいに多くの民族へと門戸を開いていった。限定されたスーパースターの時代から、複数のスターを共存させる世界へ変貌していった、といいかえてもよい。

一方、映画は、最初から「輸入産業」だった。もともと多民族国家だったアメリカ合衆国のなかでも、ハリウッドに集まった人々のエゴの強さや貪欲や得手勝手ぶりは群を抜いていたにちがいない。彼らは、神にも王にもひざまずかなかつた。腕と度胸と美貌で、世間を押し渡るのを理想とした。その空気は、映画を見る側にも伝染したにちがいない。

私は、その空気を非難しているのではない。むしろ面白がっているのだ。こういう空気からは、「純国産」という意識や、一極集中的なメンタリティなどは生まれようがないのではないか。

ハリウッドは女優を百円シヨップにも高級ブランド店にも並べなかつた

もちろん、ハリウッドはマリリン・モンローのようなアイコンも生んだ。エリザベス・テイラーやグレース・ケリーが、時代のヒロインとして一世を風靡した時期があつたことも、私は否定しない。ベティ・デイヴィスやキャサリン・ヘプバーンに端を発する「芝居のできる女優」の伝統は連綿と引き継がれているし、ルシル・ボールやドリッス・デイが中産階級の熱い支持を受けていたことも事実だ。

が、彼女たちを「国民的女優」と呼ぶのにはいささか無理があるのではないか。「国民的女優」とは観客の集合

的無意識、つまり欲望や妄想がその一

点に向かつて収斂する存在にほかならない。と同時に、彼女たちに託されたイメージとは、「外部」に向けてなんらかのメッセージを発信しているような気がする。立派でしょ、真面目でしょ、善い人でしょ、というメッセージ。ハリウッドは、そこに伴う陥穽を巧みに避けてきたと思う。偉大とか誠実とか善良とかいったレッテルに尻尾を振らない態度。「商品」の価値を適正に見きわめ、乱暴に使い捨てたりやみくもに物神化したりはしない態度。

いいかえれば、ハリウッドは、「これと思つた女優」を百円シヨップにも高級ブランド店にも並べなかつた。お



しばやま みきお ●金沢市生まれ。東京大学仏文科卒。映画やスポーツに関する評論のほか、翻訳家としても活躍。著書に『映画一日一本』『映画は待ってくれる』『大リーグ二階席』などのほか、訳書に『Meーキャサリン・ヘプバーン自伝』『野球術』『不眠症』などがある

いそれと買えない値段をつけたり、投げ売りに走つたりすることもなかつた。私は、ギャラの話をしているのではない。「映画は娯楽だ」という定理を、ハリウッドが本能的に理解しているということを指摘したかったのだ。女優は技芸や才能のエリートだが、神や伝道者ではない。だとすればやはり、アメリカは「国民的女優」を必要としなかつたというべきではないか。☺